

●日本を「戦争の方向へ」決定づけた国際連盟脱退

▽昭和8年3月27日 斎藤実内閣の時

▽犬養毅首相は「満州国」建国に 反対だった

▽建国宣言(昭和7年3月1日)しても

「中国に関する九カ国条約」「不戦条約」違反で
国際世論の袋叩きになる

国際社会から 孤立してしまうと

承認には 首を振らなかった

▽斎藤内閣は 犬養暗殺4ヵ月後

昭和7年9月15日 満州国を 承認してしまった

●斎藤を高く評価していたグルー米国大使

— 帰国したグルーは講演した(昭和18年秋) —

天皇制や神道は、軍国主義を助長しているから抹殺すべきだ。こう説く人たちがアメリカにはいるが、軍国主義さえ排除するなら、天皇制も神道も平和日本にとって邪魔ものどころか、かえって安寧を助けるものとなる。

▽ニューヨーク・タイムズは 社説で非難した

「アメリカ兵がガダルカナルで死に、タラワで傷ついたのは、天皇の国日本、神道の国日本を打ち破るためではなかったのか」

..... 天皇制存続にグルーの力

ギャラップの調査では天皇を処刑せよ33%、天皇を裁判にかけるか、終身刑に処するか、外国へ追放せよ37% — 米国世論は圧倒的に天皇批判が強かったが、グルー(国務館)はトルーマン大統領に天皇制存続を進言した。

▽グルーの日本理解には

斎藤と 夫人春子から受けた感銘が 土台に

— グルーの見た斎藤 —

愛すべき、穏やかな、魅力的な、礼儀正しい人だが、この国粹主義の荒れ狂う時代でも、幅広いレベルな見解を持ち続け、深い知恵を蔵した人だった。(昭和14年)

斎藤 実(さいとう・まこと)

安政5(1858)～昭和11(1936) 岩手県水沢生まれ。海軍大将。明治17年米国に留学。31年軍次官。39年西園寺内閣海相となり、5代の内閣で海相。大正3年シーメンス事件(戦艦建造をめぐる汚職事件)で予備役。8年朝鮮総督。ジュネーブ軍縮会議全権。昭和4年再び朝鮮総督。7年首相に就任し、満州国承認、国際連盟脱退を行なう。10年内大臣。二・二六事件で暗殺される

犬養 毅(いぬかい・つよし)

安政2(1855)～昭和7(1932) 岡山県生まれ。号は木堂。第1回総選挙以来、連続当選18回。国民党、革新倶楽部を率いて護憲、普選運動を推進、「憲政の神様」と称される。この間、孫文らの中国革命を支援。昭和4年政友会総裁。6年12月首相に就任し、五・一五事件で暗殺される

— 中国に関する九カ国条約 —

(昭和11年2月6日翻)ワシントン会議に参加した日米英など9カ国が、中国の主権尊重、領土保全と門戸開放、機会均等を約束した。

— 不戦条約 —

(昭和3年8月27日翻)アメリカの提唱で日本など有力15カ国が、パリで「侵略のための戦争はしない」と誓った。満州事変などが、国際的糾弾の対象に。

ジョセフ・グルー (Joseph Clark Grew)

1880～1965 アメリカの外交官。トルコ大使を経て昭和7年駐日大使となり、日米関係改善に努力。日米開戦で帰国、国務省極東局長、国務次官、国務長官代理を歴任。著に「滞日十年」「日本報告」

グルーを感動させた春子夫人

二・二六事件前夜(昭和11年)、グルーは齋藤夫妻を大使館の米国映画鑑賞会に招待した。翌日、弔問に訪れたグルーに、春子夫人は「夫は今までトーキー映画を見たことはありませんでした。大変楽しかったようでございます。あのような楽しい最後の一夜を与えて下さいましたことを、主人は必ずや主人に代わって、私に礼を言うよう望んでいることと存じます」

グルーは「武士の妻」という言葉を使って、戦争中だからこそ、「日本にもこのような人がいるのだ」と、アメリカ人の偏見の壁を破るため「滞日十年」の筆をとったという。

春子夫人は仁礼景範海軍中將の令嬢。昭和46年、98歳で水沢で亡くなったが、角膜は遺言で岩手県内の16歳の少年に移植された。

仁礼 景範(にれ・かげのり)

天保2(1831)～明治33(1900) 薩摩藩出身。海軍中將。慶応3年藩命で米国留学。海軍参謀本部長、横須賀鎮守府長官。明治25年海相となり、翌年枢密顧問官

内憂外患、「非常時」が流行語に

浜口雄幸首相狙撃事件(昭和5年11月)に始まり、陸軍の三月事件、十月事件のクーデター計画、血盟団のテロ(井上馨前首相、岡田三井各理事長射殺)、五・一五事件で現職首相の暗殺。満州事変、上海事変が起こり国際連盟リットン調査団の現地調査も始まっていた。

昭和大恐慌で、都会には失業者が溢れ、農村は貧困に喘いでいた。「今、何時?」と聞かれて、「非常時よ」と答えるのが流行ったという。

●五・一五事件の後、どんな内閣を作るか

▽昭和天皇にとっても

元老西園寺公望にとっても 大問題だった

▽明治憲法は「大臣輔弼(ほつ)の憲法」

昭和天皇には張作霖爆殺事件に苦い思い

関東軍高級参謀河本大作大佐は、満州を武力占領しようと昭和3年6月4日、満州軍閥首領張作霖の乗った列車を爆破。田中義一首相は、天皇に関係者の厳罰を約束したが陸軍の反対で出来ず、天皇に叱責され内閣総辞職した。

元老西園寺から「天皇は直接自分の意見を表明すべきでない」と諫められ、以来内閣の上奏には、たとえ反対の考えを持っていても、裁可されることに決心されたという。

▽天皇にとって 自分の考えとは 違わないよう
間違いなく 補佐してくれる内閣を
選ぶことが まず 大切だった

●陸軍は、後継内閣に素早く動いた

▽夕刊(5月17日)は「政党内閣絶対反対」の大見出し
陸軍が 政党排撃を明らかにしたと 伝えた

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ。九清華家の出。文相、枢密院議長。明治36年政友会総裁。39年首相。44年再度首相の時、陸軍の2個師団増設要求を拒否、陸相辞職で総辞職。パリ講和会議全権を務め国際協調に努める。山県死後、最後の元老として後継首相を奏請

浜口 雄幸(はまぐち・おさち)

明治3(1870)～昭和6(1931) 高知県生まれ。蔵相、内相歴任。昭和2年民政党結成と共に初代総裁。4年首相に就任し金解禁、ロンドン海軍軍縮条約に調印。右翼青年に狙撃されて重傷を負い総辞職

田中 義一(たなか・ぎいち)

元治1(1864)～昭和4(1929) 山口県生まれ。陸軍大將。陸相を経て政友会総裁となり昭和2年首相。山東出兵など強硬外交を推進、張作霖爆殺事件で総辞職

▽小磯国昭(陸相) 秦真二(陸相)

真崎甚三郎(参謀長) 小畑敏四郎(参謀總長)が
荒木貞夫陸相を訪ね「政党内閣では国家の急は
救えない。軍部の反対を西園寺に進言せよ」

▽永田鉄山(参謀總長)も 木戸幸一(内閣総理大臣)に
「もし政党による単独内閣の組織せられむとす
るが如き場合には、陸軍大臣に就任するもの
は恐らくなかるべく、結局、組閣難に陥るべし」

▽18日には 陸相入閣条件を 公表した
「統帥権を尊重し、軍の主張する諸政策に
協力すべきだ」閣僚拒否権も ちらつかせた

▽「軍部支持」の 国民世論をバックに
政治介入は ますます 露骨になっていった

●政友会(303議)は、引き続き政権担当に意欲

▽暗殺など政変の後には 首相は 同じ政党から

- ・政友会 原敬暗殺(大正10年11月) →高橋是清
 - ・民政党 浜口狙撃(昭和5年11月) →若槻礼次郎
- 「反対党に政権を渡せば

暗殺を奨励することになる」(西園寺)

▽鈴木喜三郎(20日 政友会総裁選)は
荒木陸相に「陸軍の条件」受け入れを 申し入れ
陸軍の了解を 取り付けたとばかりに
早々と「政友会単独政権」構想を 発表した

▽陸軍の首相候補は 平沼騏一郎(枢密院議長)
態度を硬化させ 政党排撃ムードを高めた

●西園寺は19日、坐漁荘(静岡縣)から上京した

▽お召は 16日にあったが 慎重を期して
原田熊雄(参謀)に 各界の状況を 調べさせていた
▽鈴木貫太郎(参謀)が「天皇の希望」を伝えた

後継内閣に対する「天皇の希望」

- 一、首相ハ人格ノ立派ナル者 現在ノ政治ノ
弊ヲ改善シ陸海軍ノ軍紀ヲ振肅スルノハ
首相ノ人格ニ依頼ス
- 一、協力内閣ト単独内閣ナドハ問フ処ニ非ズ
- 一、ファッショニ近キ者ハ絶対ニ不可ナリ
- 一、外交ハ国際平和ヲ基礎トシ、国際関係ノ
円滑ニ努メルコト

荒木 貞夫(あき・さだお)

明治10(1877)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。陸大校長、第6師団長を歴
任。精神主義的・反共主義的言動で皇道
派の中心的存在。昭和6年犬養内閣陸相
となり、陸軍中枢を自派で固めた。斎藤
内閣に留任。二・二六事件で予備役後13
年文相。A級戦犯で終身刑。29年仮出所

木戸 幸一(きど・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生まれ。木戸孝允の孫。昭和5年内大臣秘書
官長。文相、厚相、内相を歴任し、15年内
大臣。16年10月、主戦論の東条英機陸相
を近衛の後継首相に推挙。戦争末期、本
土決戦派を抑え聖断による終戦工作の
中心に。A級戦犯で終身禁固刑。30年仮
出所。著に「木戸幸一日記」全3巻

鈴木 喜三郎(すずき・きさぶろう)

慶応3(1867)～昭和15(1940)神奈川県
生まれ。司法次官、検事総長を歴任し大
正13年清浦内閣法相。昭和2年田中内閣
内相となり、特高警察拡充、治安体制強
化を推進した。犬養内閣内相兼法相。犬
養暗殺後、政友会総裁に選ばれた

平沼 騏一郎(ひらぬま・きいちろう)

慶応3(1867)～昭和27(1952)岡山県生
まれ。検事総長、大審院長、法相を歴任。
右翼結社「国本社」を主宰し枢密院副議
長時代、ロンドン軍縮条約に反対。昭和
11年枢密院議長となり、14年首相。A級
戦犯で終身禁固刑。仮出所中に病没

原田 熊雄(はらだ・くまお)

明治21(1888)～昭和27(1952)東京生まれ。日銀勤務、首相秘書官を経て大正15
年西園寺の秘書。重臣・高官など政界の
情報収集。著に「西園寺公と政局」

▽西園寺が「ごもつとも」と首肯くことばかり
まず「ファッションに近き者」平沼が消えた
▽政友会内閣の継続も 鈴木が総裁に選ばれた時
鈴木内閣では 実質「平沼内閣」と捨てられた
▽残る道は「中間内閣」

政党を基礎とはするが 政党党首でない人
立場の公平な人で 各界から協力を得られる人
▽西園寺内閣で 海相を務めた 齋藤の名前

●齋藤の生涯を通じて、常に高く評価された人柄

▽薩摩全盛の海軍で 次官7年 大臣は8年
朝鮮総督も 2回にわたり 9年余り
▽明治・大正の日本の海軍を 動かしたのは
山本権兵衛 齋藤実 加藤友三郎

— 山梨勝之進の言葉 —

山本大将の前に立つと、爛々と輝く灼熱の太陽の前にある思いがする。加藤大将の前に立つと、何ものをも一点の狂いもなく映し出す鏡の前に立った思いがする。齋藤大将と共にある時は、香り高いウィスキーを杯に酌み、静かに語る思いがする。

▽山本の実行力 加藤の決断力・判断力
齋藤だけは 大らかな人柄

●中間内閣最大の使命は、「事態の鎮静化」

▽西園寺は 近衛文麿(齋藤副議長)に言っている
「私には、時勢を憤って、それを切り開こうとか、
狂乱を回そうとか、そういった勇氣はない。時
勢に逆らいもしなければ、流されもしない」
▽現在の混乱は 青年将校らの 一時的な熱狂が…

— 西園寺は、齋藤内閣を決断した時 —

「軍人が政治を左右する弊害を防ぐのが今日の急務だ。結局は軍に引っ張られるだろうが、極力ブレーキをかけ、それでも止むを得ない場合は譲歩する。譲歩しても、その結果が実際に現われるのは、出来るだけ先に延ばすようにする。譲歩することで生ずる危険も、最小限に止める。これが中間内閣最大の使命だ」

…… 山本権兵衛に見込まれた齋藤 ………

山本は明治31年海相に就任すると、次官に大佐になったばかり、40歳の齋藤を抜擢した。階級を重視する陸海軍で、大佐の次官はこの前にも後にもない。

山本は海軍近代化の先頭に立ち、力はあったが座っただけで座敷が敵味方に分かれたというくらい、敵が多かった。次官に包容力のある齋藤を据えることで海軍を纏め、絶妙のコンビを組んだ。

山本 権兵衛(やまもと・ごんべい)

嘉永5(1852)～昭和8(1933) 鹿児島県生まれ。海軍大将。日清戦争を前に海軍人事を刷新。明治31年海相。日露戦争に備え「六六艦隊」を推進。大正2年首相となったが、シーメンス事件で辞職。12年関東大震災直後、再度首相となるも、虎ノ門事件(太子襲撃)で辞職した

— 独立万歳事件 —

明治43年の韓国併合以来、朝鮮総督には現役陸軍大将(執職、露川順道)が就任、憲兵による武断統治をしてきた。大正8年3月1日、ソウルで学生が独立宣言をしたのをきっかけに長年の不満が爆発、「独立万歳」を叫ぶ声が全道に広がった。デモやストに200万人が参加、警察署や官庁618カ所が襲撃され、軍隊が出動して鎮圧した。

政府は、陸軍の総督に代え海軍の齋藤を起用、文化的統治に切り替えた。

加藤 友三郎(かとう・ともさぶろう)

文久1(1861)～大正12(1923) 広島県生まれ。海軍大将。日本海海戦の連合艦隊参謀長。大正4年海相となりワシントン海軍軍縮条約を纏める。11年首相。陸海軍軍縮を実行しシベリア撤兵を完了させたが、在任中病死。死後元帥

「無為にして化す」(老の謙)

偉大な聖人の徳は、ことさら手段を用いなくとも、自然のままに任せておけば、人民は自然に感化され良い方向へ向かうだろう。

▽首相としての斎藤に 期待されたのが
何もしなくてもいいから

余計な刺激を与えず 事態を鎮静させること

▽西園寺は この時82歳 深い失望と気力の衰え

▽西園寺は 5月22日 斎藤を奉答した

この間 臨時首相の高橋是清 首相経験者

枢密院議長 陸海軍の長老(上原謙元帥 東郷平八郎元帥)を
個別に招き 意見を聞いている

▽異例なことで 時代は 元老の一存だけでは

後継首相を 決められないことを 物語っていた

首相選考は重臣会議で

木戸日記(8月26日) 内大臣ト面談。内大臣ハ先般御殿場ヲ訪問セラレタル際、西公(西園寺)ハ今後ノ内閣更迭ノ場合ノ御下問ニハ単ニ元老ノミニ対スルノミトセズ、重臣ヲ集メラレ内大臣ノ許ニテ協議奉答スルコトトシ度ク、元老ノ御優遇モ高齢病弱ナレバ御辞退シ度シトノ意ヲ漏ラサレタリトノ御話アリ

この後、内閣奏請制度は元老単独から重臣会議に改められることになった。

●斎藤内閣は、11日間の政治空白を経て5月26日成立

▽スローガンは「挙国一致」 各界勢力の結集

蔵相は政友会の高橋留任 民政党にも内相

政党人は10人から3人に激減 官僚出身が5人

▽裏を返せば 各界の勢力均衡 寄り合い所帯

「譲歩と妥協」が 前提の内閣だった

▽荒木陸相も 五・一五事件の責任をとらず 留任

皇道派は 荒木辞任が 勢力後退につながる

三長官会議(閣 参謀長 参謀監)で

荒木留任を決め 斎藤首相に申し入れた

▽政治も外交も 陸軍の 意のままに動く必然性

●「満州国承認」の世論は、すでに盛り上がっていた

山梨 勝之進(やまなし・かつのしん)

明治10(1877)～昭和42(1967) 仙台市生まれ。海軍大将。昭和3年海軍次官。ロンドン軍縮条約締結に尽力し8年予備役。14年学習院長となり21年まで皇太子(現 現)の教育に当たる

近衛 文麿(このゑ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945) 東京生まれ。五摂家筆頭の関白家の出。昭和6年 貴族院副議長。8年議長となり革新貴族として期待を集める。12年第1次内閣を組織したが、支那事変収拾に失敗。15年第2次内閣で松岡洋右を外相に起用、日独伊枢軸外交・南進政策を進めた。松岡を更迭、第3次内閣で日米交渉打開を図ったが、東条の開戦論の前に総辞職。戦後、GHQの戦犯出頭命令で服毒自殺

高橋 是清(たかひし・こけい)

安政1(1854)～昭和11(1936) 江戸生まれ。日銀副総裁の日露戦争中、戦費調達の外債募集に成功。日銀総裁、蔵相を歴任し、大正10年原敬首相暗殺で首相、政友会総裁。昭和2年田中内閣蔵相となり金融恐慌を収拾。満州事変後も犬養・斎藤・岡田内閣蔵相。二・二六事件で暗殺

国際連盟

第1次世界大戦後の世界秩序と国際平和を守るため、大正9年1月10日、ジュネーブ(スイス)に設立された。一番熱心に呼び掛けたのは米国だったが、上院でベルサイユ講和条約の批准が否決されたため米国は不参加。

連盟理事会は、常任理事国5カ国(日本イギリス、フランス、ドイツ、イタリア)と非常任理事国9カ国(任期3年 この時は中国、スペイン、ポーランド、ユーゴスラビア、ルウェー、アイルランド、ベルギー、グアテマラ、パナマ)の計14カ国で構成された。

▽リットン調査団は 2月29日(趙館前日)来日

日本の要請で 派遣されたものだった

調査団派遣の経緯

蒋介石(国民政府主席)は満州事変勃発3日後、昭和6年9月21日、連盟規約第11条(戦争の発生シタルトキハ事務総長ハ何レカノ連盟国ノ請求ニ基キ直ニ連盟理事会ヲ招集スベシ)により緊急理事会招集を請求。30日の理事会は、日本の「漸次撤兵」声明を評価し、「事件不拡大と速やかな撤兵」の勧告決議をして散会した。

ところが関東軍が錦州を爆撃(10月8日)したため、10月24日の理事会は、米国代表を理事会に加えること決め、日本に対する期限付き撤兵勧告案を13対1、日本の反対だけで可決(全一致のため法的には不成立)した。

日本は公正な立場での現地調査を提案、12月10日の理事会で中立的調査団の派遣が採択され、リットン(類)を団長とする米・仏・独・伊の5人の調査団派遣が決まった。

外務省は「陸軍省外務局」に

国際協調・平和外交の幣原喜重郎が外相の座を去ってからは、陸軍の代弁者に様変わりしていた。関東軍が次々と事変を拡大する中、ただそれを追認し処理するだけの立場に追い込まれて、「自主外交だ」と、外交の主体性を回復しようとするほど、勢い陸軍との協調路線をとることになり、対外強硬論者が幅をきかす結果になった。

▽谷正之(アヲノ) 白鳥敏夫(鶴岡)は 連盟脱退論者

▽外務省では 連日のように 陸軍幹部を招き 満州国承認に向けて 情報交換をしていた

●斎藤首相は、「満州国承認はもはや避けられない」

▽首相就任直後の議会で

松岡洋右(坂城)が 満州国承認を迫ると

「出来得る限り速やかに承認したい考えを

持っております」承認に 積極的意向を表明

▽衆議院本会議も 6月14日

承認決議案(政会・民院共同提案)を 満場一致で可決

蒋介石(しょう・かいつき)

1887~1975 明治40年日本に留学、陸軍が中国人のために作った振武学校で学ぶ。辛亥革命で帰国、大正15年国民革命軍総司令として「北伐」を開始、昭和3年北京に入城して国民政府主席に就任。支那事変が始まると国共合作を受け入れ対日戦を指導。戦後、国共内戦を起こし、内戦に敗れて24年台湾に逃れる

幣原 喜重郎(しはら・きじゅうろう)

明治5(1872)~昭和26(1951) 大阪生まれ。大正13年以来、加藤・若槻・浜口内閣外相。国際協調、平和外交を展開。戦後、昭和20年10月首相。24年衆議院議長

谷 正之(たに・まさゆき)

明治22(1889)~昭和37(1962) 熊本県生まれ。昭和5年外務省アジア局長となり外務次官を経て16年東条内閣情報局総裁。18年中国大使。戦後31年駐米大使

白鳥 敏夫(しらとり・としお)

明治20(1887)~昭和24(1949) 千葉県生まれ。昭和5年外務省情報部長。8年スウェーデン公使、13年イタリア大使。15年外務省顧問となり日独伊三国同盟締結を推進した。17年衆院議員。A級戦犯で終身禁固刑を受け、服役中に病死

松岡 洋右(まつおか・ようすけ)

明治13(1880)~昭和21(1946) 山口県生まれ。廻船問屋の実家が倒産、13歳で渡米、苦学してオレゴン大を卒業。外交官となり、大正10年駐華総領事で退官。満鉄理事、副総裁を経て昭和5年政友会から衆院議員当選。7年国際連盟全権となり、総会で満州国否認に抗議して退場、国民的英雄に。15年近衛内閣外相。日独伊三国同盟締結、日ソ中立条約に調印。A級戦犯で起訴されたが結核で病死

▽問題は 承認の時期だった

「承認する」と言っても 承認さえしなければ
いくらでも 外交交渉の余地は あった

- 斎藤首相のミスは、満州国承認が連盟脱退につながる危険性を、認識していなかったこと

▽最大のミスが 外相に起用した 内田康哉

外相4度 駐米・駐露大使をした ベテラン外交官

▽満州事変直前 満鉄総裁にしたのは 幣原外相

満州の不穏な動きに 関東軍を抑えるため

▽ところが 関東軍に すっかり共鳴

「日本の立場から見る時、もはや満州問題なし。
残るは満州国承認問題あるのみ」と 講演した

- 内田外相は、満州国承認に向け着々と準備した

▽「在満機関統一要綱」を 7月26日 閣議決定

満州には 関東庁 総領事館 関東軍 満鉄

「四頭政治」と 陰口されたほど、縄張り争い

▽「すっきりさせる」という名目で

満州問題を 外務省所管から外し 関東軍に

▽関東軍司令官が

満州駐在特命全権大使 関東州長官を兼務

関東軍が 軍事だけでなく 行政・外交も握った

▽日本は 8月25日 「満州国承認」を 世界に発表

▽森恪(政友会議員)が 議会で質問した「承認の決行は、
自主外交への大転換を宣言するものだから、列
国との摩擦が生じた場合、政府はどうするのか」

▽内田は「焦土外交」演説で 答えた

「わが国民は、この問題のためには挙国一致、
国を焦土としても、この主張を徹すること
においては、一步も譲れないという決心を
持っているといわねばならない」

▽対中国強硬論者の 森でさえ「そういうことになら
ないよう、努力してもらわなければ困る」

▽日本は13年後 焦土の運命を 迎えることになる

- 9月15日、「日満議定書」に調印、正式に承認した

▽議定書は 2カ条の簡単なもの「日本の権益を尊重
し、日満共同防衛を約し、日本軍駐屯を認める」

▽植民地的支配を示す 秘密協定が 結ばれていた

内田 康哉(うちだ・こうさい)

慶応1(1865)～昭和11(1936) 熊本県生
まれ。外務次官、駐米大使を歴任し明治
44年第2次西園寺内閣外相。ロシア大使
の後、原・高橋・加藤(友)内閣外相。昭和6
年満鉄総裁。7年斎藤内閣外相となり満
州国承認、国際連盟脱退を推進した

— 同じ考えの外相選任が大切 —

明治憲法は、今の憲法のように首相
に大臣に対する指揮監督権もなければ、
クビにすることも出来ない。

第55条 国務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ
其ノ責メニ任ス

外交問題は、外相が直接天皇に責任
を負っていた。

— 「ゴム外交」と評した清沢冽 —

内田が大正7年原内閣外相に就任す
ると、清沢は「ゴムのような弾力性が
ある」と協調外交、時代への適応性を
評価した。ところが、満州での内田変
身に、「ゴムが化石した」と表現した。

ゴムはゴムでも、ガチガチの軍部寄
り、柔軟性のないゴムになっていた。

清沢 冽(きよさわ・きり)

明治23(1890)～昭和20(1945)長野県生
まれ。中外商業新報(現産経)初代外報部長
を経て昭和2年朝日新聞入社。中央公論
特派員、報知新聞論説委員など、リベラ
ルな評論家として論陣を張った。「暗黒
日記」は戦争中の貴重な現代史史料

..... 内田はリットンに説明した

「満州国は満州人によって自発的に
作られた国家だ。だから、九カ国条約
には違反しない。満州国承認は、日本
の自衛権に基づくもので関係国と協
議する必要もない」

日満議定書

(一) 満州国は従来の日中間の条約、協定その他の取り決め及び契約により日本又は日本臣民の有する権利、利益を確認し、尊重すること

(二) 日満共同防衛を約し、所要の日本軍が満州国内に駐屯すること

秘密協定 ①国防は日本委託で費用は満州国の負担②日本軍の必要とする輸送機関・施設を日本指定の機関に委託③日本軍の施設に対する満州国の援助④参議及び中央・地方官署への日本人任用、その人選及び解職は日本軍司令官の同意を要す

▽関東軍高級参謀 板垣征四郎大佐は

執政・溥儀(3月9日)に 秘密文書に調印させた

▽斎藤内閣は「これで日満両国は国防上、国民的生
存上、不可分の関係になった」と 政府声明

対外的には「門戸開放、機会均等」順守を 約束

▽国内は「日満新時代来る」と 熱狂的に拍手

朝日新聞も社説で「世界史に一新紀元を画す」

「国際連盟何するものぞ」ナショナリズム高揚

▽世界は「国際連盟に対する挑戦だ」と 反発

満州では「平頂山事件」が 起きた

●日本は、なぜ承認を急いだのか？

▽調査団の報告書公表は 10月2日

▽不利な報告になることが 予想され

公表後では 承認しにくくなる

承認することで「独立国家」としての既成事実

▽日本は 国家として 引き返せない一線を越えた

▽連盟脱退の運命は 承認によって 決まった

●昭和8年2月24日、ジュネーブで国際連盟臨時総会

▽総会議長イースマン(ベルギー代表)が 開会を宣言

「満州国不承認」を内容とする

十九ヵ国委員会の報告書 審議に入った

▽松岡代表は 約50分間 反対の熱弁を振るった

「支那は混沌たる未開国である。十九ヵ国委員会の報告は現実とは相容れず、遠く現実から離れた前提を基礎として、判断を下すものである」

森 恪(もり・つとむ=通称もり・かく)

明治15(1882)～昭和7(1932) 大阪生まれ。三井物産に入り20年近く中国勤務。大正9年衆議院議員となり昭和2年田中内閣外務政務次官。山東出兵など、対中国強硬外交を推進した。4年政友会幹事長。6年犬養内閣書記官長

板垣 征四郎(いたがき・せしろう)

明治18(1885)～昭和23(1948) 岩手県生まれ。陸軍大将。昭和4年関東軍高級参謀となり、満州事変を起こす。関東軍参謀長、第5師団長。13年近衛内閣陸相。支那派遣軍総参謀長、朝鮮軍司令官、20年第7方面軍司令官。A級戦犯で刑死

溥儀(ふぎ)

1906～1967 清朝第12代、最後の皇帝宣統帝。辛亥革命により退位。昭和7年、満州国執政、9年皇帝。敗戦でソ連に逮捕。25年中国撫順戦犯管理所に移され34年特赦。39年政治協商全国委員

平頂山事件

9月15日夜、満鉄経営の撫順炭鉱(遼省)が抗日ゲリラに襲撃され日本人が殺された。独立守備隊主力が、ゲリラ討伐に出動中の手薄なところを狙われたもので、留守を預かる第2大隊第2中隊は、翌朝、4時。離れた平頂山部落を包囲し、ゲリラ内通の理由で、住居を焼き払い、機関銃を掃射して3千人の部落を抹殺した。逃げ延びたのは10人程度だったと言われる。

作家・沢地久枝さんの「昭和史の女」によると、中隊長・井上清一中尉の新妻が出征前夜、「後顧の憂いを断つため」と遺書を残し自殺していた。井上の「耐えられない不覚」の思いが報復に走らせたのか…。

中国が支那事変で「日本軍残虐行為

▽そして「諸君が報告を採択をせざることを要求する」と結んだ

●世界は、圧倒的多数で「満州国」を否定した

▽ベネズエラ カナダ リトアニア代表の
原案支持の演説の後 午後1時20分
イースマンが「これより表決に入ります」
▽アルファベット順に「イエス」「ウイ」が続き
松岡が 初めて「ノー」と強く叫ぶと
会場は ちょっと ざわめいた

▽表決は 42対1 反対は日本だけ シャム(タイ)が棄権

▽松岡は 演壇に昇り 英語で

「日本が極東と世界の平和に貢献せんとしていることは事実であります。しかし、報告の受諾は為す能わざるところであります。報告は、極東の平和を確保するものとは考えられません。いまや、平和を達成する様式について、日本と他の連盟国が別個の見解であるとの結論に達しました。日支紛争、満州事変に関して連盟とは協力の限界に達したと感ぜざるを得ません」

▽最後を 日本語で「さようなら」と結び

仏語に訳されるのを待たずに 演壇を降り
席にもつかず 代表団を率いて 退場した

▽日本が 世界から孤立し 国際連盟の

平和維持システムが 破壊された瞬間だった

●日本国内は大歓迎、松岡は国民的英雄に

▽朝日新聞ジュネーブ特派員至急報

「連盟よさらば！ 遂に協力の方途尽く

総会、勸告書を採択し、我が代表堂々退場す」

▽帰国の松岡を 凱旋将軍のような熱狂で 迎えた

▽新聞は「日本外交六十年の決算」を謳い

「我らは自主外交を願うこと久しかった。いま初めて我は我なりという、独自の外交を打ち立てるに至った」「自主外交の旗手」と讃えた

●脱退は「松岡の本意ではなかった」？

▽時事新報特派員 長谷川進一(のち駐露、東大教授)

「強い姿勢を示しつつ、

話を纏めるのが、松岡の本心だった」

の典型」として非難したものに「三光作戦」一部落ごと殺し尽くし、奪い尽くし、焼き尽くす一があったが、その原型となったのが平頂山事件だと言われる。

— 佐藤尚武は「劇的シーン」と回想 —

いまでも目に浮かぶのは、白髪で痩せた体のベルギーの議長イースマンが、議長席にしょんぼり座って、我々の立ち去るのを見送っていた姿だ。満場寂として声なし。

佐藤 尚武(さとう・なむね)

明治15(1882)～昭和46(1971)大阪生まれ。ポーランド公使を経て昭和2年国際連盟日本事務局長。ベルギー大使の時、連盟臨時総会日本全権。駐仏大使の後、12年林内閣外相。17年ソ連大使となり、戦争末期にソ連への仲介依頼を命じられたが、「無条件降伏の外なし」を主張。22年参院議員となり24年参院議長

— 飯塚浩二(飯塚)は話している —

パリに留学中だった飯塚は、随員に親戚の岡野海軍中佐がいたのでジュネーブへ出かけ、松岡に紹介して貰った。ホテルのバーで飲んでいると、代表団の面々がどうやって使命を果たすか、侃々諤々の論議だった。すると松岡が「陛下から、何とか喧嘩にならないように妥協して来いと仰せつかっている。脱退すれば、腹を切ってお詫びしなければならぬ。貴様、その覚悟をしてくれるか」

酒が入ったこととはいえ、真剣なやりとりにジーンとした思いでいると、その松岡が帰国して英雄扱い。飯塚は「なるほど、政治とはそういうものかと思った」と話しているが、岡野が「大国の面子もいいが、いくら日本

▽日本を出発前夜 新聞記者に

「満州国がすでに承認された以上、

日本の進むべき道は一本しかないじゃないか」

▽ジュネーブに着くなり 英仏外相に

「満州国が承認されないなら、

日本は連盟を脱退する」 強硬論をぶつけた

▽長谷川は「ポーカーで言うブラフ。松岡は交渉が難しいことを知っていたから、はったりをかけて、少しでも有利にしようとしたのだ」

●松岡を「パラドックス、逆説に陥りやすい人」(齋藤)

▽右に行こうとすれば 左に向かい

大きな肯定を与えようとすれば まず 強い否定

— 松岡について加瀬俊一 —

松岡が外相時代に秘書官をした加瀬は、松岡から「外務省にデモが押しかけて来たら、どうするか」「大手を広げて、立ちほだかっちはいけない。デモは狂暴になるばかりだ。いいか、デモの先頭に立って突っ走る。一緒に走る。そして次の角で曲がるんだ」これが松岡の答えだったが、加瀬は「その松岡が曲がりそこねたのが、日独伊三国同盟だった」と書いている。

▽松岡の口癖は「鋼鉄の決意」

自信家であり 雄弁家 鋭い舌鋒 激しい気迫
クソ度胸に 英雄的なゼスチュアも

●「満蒙第一主義」の松岡に、国際連盟の舞台

▽リットン報告書が 連盟で審議されることに

▽日本の歩み寄りを 期待し

現実的な解決を 提案したものだったが…

▽リットンは 奉天滞在中 本国の妹に手紙

「満州国は虚偽である。

満州の混乱状態の大部分は日本自身が作った」

▽「現在の満州政府は、そのまま残し、

形式だけは、あくまで国民政府の任命にする」

▽報告書を出す時

「日本があらゆる妥協を拒否すれば、日本は非常に高価な犠牲を払わなければならないだろう」

▽リットン報告ベースの話し合いは 可能だった

が強気だろうと世界中を敵に回して戦えるものではない、子供や孫に、お父さんたちは一体何ということをしたくれたんだ、と言われて、顔向けできないような結果になることは目に見えている」 慚然としていた姿が忘れない、と言っている。

飯塚 浩二 (いづかこうじ)

明治39(1906)～昭和45(1970)東京生まれ。昭和7年ソルボンヌ大に留学し外務省嘱託、立大教授を経て、18年東大東洋文化研究所教授。所長を2回務めた

加瀬 俊一 (かせとしかず)

明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生まれ。昭和15年松岡外相秘書官。開戦時北米課長。終戦の時、情報課長として降伏調印全権の随員を務めた。戦後、33年にユーゴ大使。著に「戦争と外交」

…… 松岡を「満蒙第一主義」に ……

廻船問屋の実家が倒産。13歳の時に渡米し、苦学してオレゴン大を卒業、外交官試験(船37年)に首席で合格。人種差別の激しい米国で苦勞し、最初の赴任地が上海だったことが、「大陸派外交官」となる土台となり、三井物産上海支店勤務の森恪と結びつけることになった。日本海海戦の時(船38年5月27日)、バルチック艦隊が対馬海峡へ来るのかどうか、津軽海峡、宗谷海峡なら連合艦隊は回航しなければならない—石炭運搬船の上海入港を掴み「バルチック艦隊、対馬海峡へ向かう公算大」と打電したのは、25歳の若き領事館補松岡だった。

中国総領事の40歳の時に退官、満鉄に入り、理事、副総裁。これが「満蒙重視」の考えを強めさせた。政友会代議士になった松岡は昭和6年1月の議会

▽出来なかったのは「満州国」を承認した以上
「国家の威信」にかけても 取り消せなかった

●日本国内は、各界各層ほとんど「拒絶反応」

▽関東軍幹部は 政府に「連盟脱退」の連判状
▽鈴木政友会総裁「越権であり、認識不足だ」
▽在郷軍人会は 全国各地で「報告書排撃大会」
▽「夢を説く報告書 誇大妄想も甚だし」(棘田綱)
▽白鳥(外務省顧問)もまた

報告書の内容を 意図的に 操作 歪曲し

日本にとって 不利であるように 宣伝した

▽報告書に 冷静に 耳を傾ける余裕はなく

「満州国」が 認められない限り

全く 妥協の余地が ないように見えた

●昭和天皇だけは、「報告書をそのまま鵜呑みに」

「昭和天皇独白録」から

「私は報告書をそのまま鵜呑みにして終ふ積りで、牧野(伸顕)、西園寺に相談した処、牧野は賛成したが、西園寺は閣議が、はねつけると決定した以上、之に反対するのは面白くないと云ったので、私は自分の意を徹することを思ひ止つたやうな訳である」

●連盟脱退に向け、意図的な人事だったのでは？

▽報告書審議の連盟理事会 昭和7年11月21日から

▽斎藤内閣は 松岡を首席代表に

長岡春一(フランス大使) 佐藤尚武(ベルギー大使)の代表団

▽「本場仕込みの流暢な英語力」松岡起用の理由

松岡を 強力に推したのが

連盟脱退論者の 谷 白鳥 森恪

▽斎藤首相 西園寺は この人事を渋った

「全権にした場合、一挙に脱退に持ち込みは…」

▽内田外相は「松岡は口も八丁、手も八丁。時代はま

さに実力時代ではないか。松岡は適任なのだ」

▽「軽々しいことはしないように」条件付で承認

●松岡出発の時、東京駅は身動きできないほどの雑踏

▽「松岡代表万歳」「景気よく脱退して来い」

で「満蒙問題は、わが国の存亡にかかわる問題である。わが国民の生命線である」と、幣原外相の協調外交を激しく批判した。満州事変が始まると、大阪毎日、東京日日が「守れ満蒙一帝国の生命線」。4号の大特集を組み、大阪や京都の師団では「その所論、憂國的だ」と、大阪毎日講読運動まで。

— リットン報告書(昭和7年10月2日公表) —

本文200号、付属文書700号から成り
①日本軍の軍事行動は正当なる自衛手段と認めるを得ず②満州国の成立事情も純粹に自発的独立運動の結果生まれたものとは考えられず、日本人の手により着手、組織、遂行されたものとし、中国の満州における主権を容認する立場に立っていた。

解決のため10項目を掲げ、第1項で日中両国の利益を両立させることとし、満州の日本の權益の存在を認め、満州の自治が確保されることを勧告している。具体的には、東三省自治政府(瀋、誦、黠)の樹立、日本の憲兵隊による秩序維持、「大部分は日本人」の外国人顧問の任命などを提案し、日中両国の利益調整を列国の共同管理下に置こうというものだった。

牧野 伸顕(まきののぶあき)

文久1(1861)～昭和24(1949) 鹿児島生まれ。「維新の三傑」大久保利通の次男。駐伊・駐埃公使、文相、農商務相、内相を歴任後、大正10年宮内大臣。14年からは内大臣となり、政党・官僚・軍部・財閥との調整に当たる。親英米派と非難され、昭和10年内大臣を辞任。二・二六事件で襲撃され、難は逃れたが以後隠退。戦後の首相吉田茂は女婿。著に「回顧録」

- ▽松岡への 激励電報 手紙は 万を超えたが
「話を纏めて帰って来い」は ほんの1,2通
- ▽見送りの有田八郎(外務官)は 松岡の手を握り
「自重してくれ。世論に惑わされて、取り返しの
つかないことになるのを避けなければならん」
- ▽出発の時から「脱退してくれば英雄」だった

●松岡の立場は、苦しいものだったが…

- ▽曖昧な形で 話を纏め
とりあえずは 脱退を避けるチャンスは
数少なかつたとはいえ あつた
- ▽状況次第で 態度を変える 状況的性格が災い
- ▽後で「連盟脱退は神風に等しい」

— 満州事変も積極的に評価 —

満州事変前の日本は、芸者、富士山、茶の湯に代表される日本で、四流民族に低落するところだった。それが満州事変を契機として、日本は外国追随をやめ、日本精神に蘇ったのだ。

- ▽松岡自ら「虚名」と言った「英雄扱い」が
松岡の運命を 狂わせる
近衛内閣外相に返り咲き 日独伊三国同盟締結

●斎藤首相は、連盟脱退の非常手段は避けたいと…

- ▽政府訓令も 「反駁すべき点は反駁し、基本的な態度としては、報告書の不備な点を指摘し、攻撃的であるよりは、むしろ説明的な態度をとる。満州国問題は、事態静観の方針で進む」
- ▽臨時総会(昭和7年12月6日)で 松岡は 46分間
メモ用紙1枚を持っただけで 無原稿演説

— 松岡の「十字架演説」 —

ヨーロッパやアメリカは、日本を十字架にかけようとしている。しかし、数年経たないうちに、世界の世論は変わるだろう。ナザレのイエスがついに世界に理解されたように、日本もまた世界に理解されるだろう。

- ▽各国代表が「素晴らしかった」と 握手を求めた
- ▽外交交渉に大切なのは 妥協点を見付け
一歩後退・二歩前進の 努力だったので…

長岡 春一(ながおか・しゅんいち)

明治10(1877)～昭和24(1949)山口県生まれ。チェコ・オランダ公使、条約局長、ドイツ大使を歴任。昭和7年国際連盟日本代表・フランス大使。10年からハーグの国際司法裁判所裁判官を務めた

有田 八郎(ありた・はちろう)

明治17(1884)～昭和40(1965)新潟県生まれ。昭和7年外務次官。ベルギー・中国大使を経て、11年から広田・第1次近衛・平沼・米内内閣外相。戦後28年衆院議員

— 異常なほど強かった皇室崇拝 —

松岡は外相時代、日本の外交文書は「帝国」と書かなければならないのに、「皇国に書き直せ」と言って、条約局長を困らせた。篠突く雨に打たれながら伊勢神宮の玉砂利に土下座して、礼拝した話は有名だ。

……「松岡洋右縦横談」……

(文芸春秋・昭和8年9月号) 誰にも会わないでいたい。自分独りの時間を持ちたい。これが私の現在持っている念願なのである。世間の人々が「松岡は死んでしまった」と思ってくれたら、それでいいのである。日本人としてなすべきことをなすだけで、現在受けているのは虚名である。駅頭は私を出迎える人々で溢れ、私の臉には熱い涙が沸いたが、そんな出迎えを受けるだけの資格は私にはない。静養、静思、沈黙。これが現在の私の一切なのだ。満蒙が日本の生命線であるとの提唱は、世間の人々にはっきり認識されたようである。私も密かに来るべき日に備えている。時がくれば私も再び人々の面前に出るであろう。

▽各国が「日本は頑なに妥協を拒否している」と
思っている点では 少しも 変わらなかった

●対日強硬論をとって結束した小国4カ国

▽スウェーデン チェコ スペイン アイルランド
連盟こそは 民族自決主義を保証し

大国と 対等に発言できる 唯一の機関

▽満州での 日本の不法行為を 黙認すれば

欧州での 小国に対する脅威を 野放しにする

▽英仏の常任理事国は 日本を弁護する姿勢

日本の脱退が 連盟崩壊につながるのを 恐れた

▽問題は 12月9日

十九カ国委員会(申辯)の 審議に移された

●松岡は、マスコミ操作もうまい人だった

▽現地記者団に「満州のことが

連盟にはよくわかっていない」と 非難する

▽それが 日本に打ち返され 国民感情を煽った

▽全国の新聞・通信社132社は 12月19日

「満州国独立支持」の 共同宣言を

4段抜きの社告で 一斉に 掲載した

▽連盟各国の態度を 硬化させ 悪循環に

▽「妥協したら国賊になり 脱退したら英雄になる」

松岡自身が その舞台を 作り出していった

●連盟の対日感情を、決定的に悪くした熱河作戦

熱河作戦

熱河省は万里長城から北の地域。満州国建国の際、東三省だけでなく、熱河省も領土に含むと宣言していた。関東軍にとって、満州の安定支配には欠かせない地域で特産品アヘンも財政上大きな魅力だった。

昭和8年元日夜、山海関守備隊(防賊の贖)裏庭、鉄道線路に手榴弾4個が投げ込まれ、関東軍は3日これを口実に山海関を占領し、熱河作戦態勢を整えた。これも、関東軍の指示による守備隊長・落合甚九郎少佐の自作自演だった。

▽陸軍省は 1月22日「連盟から脱退することで
行動の自由を確保すべきだ」と 声明した

新聞・通信132社共同宣言

(昭和7年12月19日) 満州の政治的安定は、極東の平和を維持する絶対の条件である。而して満州国の独立と其健全なる発達とは同地域を安定せしむる唯一最善の途である。東洋平和の保全を自己の崇高なる使命と信じ、且そこに最大の利害を有する日本が、国民挙げて満州国を支援する決意をなしたことは、まことに理の当然といはねばならない。いな、ひとり日本のみならず、真に世界平和を希求する文明諸国は、ひとしく満州国を承認し、且其成長に協力するの義務ありといふも過言ではないのである。

然るに国際連盟の諸国中には、今尚ほ満州の現実に関する研究を欠き、従って東洋平和の随一の方途を認識しないものがある。われ等は、かかる国々の理解を全からしめんことを、わが当局者に要望すると共に、苟も満州国の厳然たる存立を危うするが如き解決案は、たとひ如何なる事情、如何なる背景に於て提起さるるを問はず、断じて受諾すべきものに非ざることを、日本の言論機関の名に於て茲に明確に声明するものである。

…… 高橋蔵相は熱河作戦に反対した ……
「日本は孤立のまま成算のない戦争に引き込まれる。条約に従ってこそ、日本の立場も主張できるのだ」閣議で支持する閣僚はなく、斎藤首相も沈黙したまま。荒木陸相に「近ごろの日本の外交は、まるで陸軍が引きずっているような感じだ。新聞なども、二言目には脱退など何のと騒ぎ立てる。外交について、事毎に陸軍が声明したりするが、なぜ、そういうことをするのか」荒木が「あれは新聞が出すので、陸軍が宣伝するわけではな

▽関東軍も 2月23日 (国際連盟臨時総会の前日)

「ゲリラ討伐」を名目に 3方面から熱河省に侵攻

▽昭和天皇は「連盟審議に悪影響」を心配された

▽関東軍は 4月10日 (連盟脱退後)

万里長城を越え 河北省 (中社) に 攻め入った

▽天皇が 真崎甚三郎 (参謀長) を 厳しく 問い質し

関東軍司令官は 19日に 撤退命令

5月31日 唐沽 (タンクー) で 停戦協定が結ばれた

▽関東軍にとっては「満州事変の総仕上げ」

満州支配を 安定させると共に

やがて 中国本土へ侵攻する 足場を築いた

●イギリスは、「日本引き止め」に懸命の努力

▽フランスと「満州国否認」を省いた案文を

作ったが 中国の反対で 流れた

▽「和協委員会」を作り 米ソを入れて

日中両国の 調停を図る案を 出したが

「連盟に入っていない米ソが

加わるのはおかしい」と 日本が反対

▽十九カ国委員会は

対日勧告を決議 報告書の作成に

▽内田外相は 閣議で

「重大なる決意 (連盟脱退) を考慮せざるを得ない」

▽英外相は 1月28日 駐日大使を通じて

「議長宣言にするから、どうか」 妥協を求めた

▽議長宣言なら 決議と違って 拘束力を持たない

日本が反対なら その旨 声明すればよく

連盟も 反対されても 面目は保てる

そうしておいて「和協委」で 中国と交渉を

▽脱退論者の内田外相は 拒否してしまった

▽残る道は 強い拘束力を持つ 勧告書に

斎藤首相は 不満を表明したが

連盟問題は 外相の所管事項 どうにもならない

西園寺に気力の衰え

牧野内大臣は、英外相提案が脱退を食い止める最後のチャンスと見て、原田に「英国案を受け入れるよう、西園寺から外相に言って貰ったらどうか」と奨めたが西園寺は「外務大臣に指図するわけにもいかない」と消極的だった。

い。向こうが勝手にするのだから、止むを得ない」高橋は皮肉たっぷりに「なぜ、それを取り締まらんのか。今日の陸軍の力を以てすれば、それくらいのことは何でもあるまい」

高橋は、内田外相にも「一体君は、いつまで陸軍に縛られているのか。それじゃ困るじゃないか」官僚中心の内閣では、高橋のような気骨のある政治家は少なくなっていた。

広幡侍従次長の語る天皇

陛下のお部屋に伺うと、室内をグルグル回っておられる。ノックして入っても、お気づきにならない御様子の時すらあった。非常に畏れ多い表現だが、まるで猛獣が檻の中を右往左往している、あれを想起させるようなことがあった。

真崎 甚三郎 (まさき・じんざぶろう)

明治9(1876)～昭和31(1956) 佐賀県生まれ。陸軍大将。台湾軍司令官を経て昭和6年参謀次長。皇道派の指導的存在となり、9年教育総監。10年更迭され統制・皇道派对立激化の原因となる。二・二六事件で軍法会議にかけられたが無罪に

唐沽停戦協定

河北省東部 (万里長城の西側) を非武装地帯とし、治安は中国の警察が当たるが、「中国軍ここに入るべからず」という地域が、中国本土に設定された。関東軍は、中国軍撤退の監視のため、随時飛行機で視察することになった。

…… 真崎は、天皇に抑えられ不満 ……
第2師団長 (嶋) の東久邇宮稔彦中將に「陛下は、参謀本部の上奏をなかなかお聞きにならない。殿下に、お力添えをお願いしたい」ところが東久邇

●十九カ国委員会は2月16日、対日勧告を含む報告書を作成、各国に通告した

▽リットン報告書を踏襲したもので

満州に対する主権は 中国にあるとして

満鉄付属地以外の 日本軍の即時撤収を指示

▽新聞各社は 号外を発行「即時脱退」を訴えた

▽在郷軍人会 右翼からは

齋藤首相 西園寺に「脱退せよ」の電報

▽西園寺も「どうも様子を見るに、到底脱退は免れんな。結局、脱退へ引きずっていかれそうだ」

●「あの時が歴史の分岐点だった」

▽戦後 こう回想する 沢田節蔵(國連盟日本事務局長)

▽2月17日朝 松岡が来て

1枚の電文を渡し「大至急、政府に打電しろ」

松岡の至急極秘電

第135号(大鷗) 往電第128号発後当地通信員ノ傍受セル東京電報ニ依レハ帝国ノ採ルヘキ態度ニ関シ種々取沙汰セラレ居リ事態ノ殊ニ憂慮ニ堪ヘサルモノアル処従来我方ノ採リ来レル態度ニモ鑑ミ事茲ニ至リタル以上何等遲疑スル処無ク断然脱退ノ処置ヲ執ルニ非スンハ徒ニ外間ノ嘲笑ヲ招クニ過キスト確信ス

▽激越な電文に 沢田が びっくりして

「他の代表にも見せたのか」松岡は「ノー」

▽沢田は 長岡 佐藤にも 集まって貰い「脱退するかしないかは、政府が決めることだ。現地の代表が指示まがいの行動をするのは宜しくない」

▽長岡 佐藤は 松岡の熱弁に負け 打電に賛成

●この電報が、政府判断に決定的な影響を与えた

▽政府部内は なお 意見が分かれていたが

齋藤首相が まず 脱退の肚を決めた

▽19日 西園寺を訪ね

「大勢すでに止むを得ない」と 報告した

▽西園寺が「現地から何か言ってきたか」

齋藤が 松岡電報を見せると

「そうかなあ」とだけ言って 脱退を 了承した

▽政府は 20日「脱退」を閣議決定 訓令した

宮から「陸軍だけに偏ったことを期待するのは、甚だけしからん」と拒絶され、「この宮さんは国家観念に乏しい」と触れ回ったという。

東久邇 稔彦(ひしく・なるひこ)

明治20(1887)～平成2(1990) 京都生まれ。陸軍大将。昭和20年8月、初の皇族内閣を組織し、終戦処理に当たる

内田は脱退に向けて

1月31日、西園寺を訪ねて経過報告をすると、新聞記者に「西園寺公は全ての問題を了解された」と喋り、外務省幹部にも「公はやはり、脱退に賛成され、総理もいずれは賛成する」

脱退に向け西園寺まで利用した。西園寺はこれを聞いて、「人間は田舎(満州)に行つて来ると、どうして、ああ馬鹿になって来るんだろうね」

沢田 節蔵(さね・せつぞう)

明治17(1884)～昭和51(1976) 鳥取県生まれ。ニューヨーク総領事を経て昭和5年国際連盟日本事務局長。9年ブラジル大使。戦後24年東京外語大学長。29年のユネスコ総会に日本代表として出席。混血児のためエリザベス・サンダース・ホームを開設した美喜は夫人

齋藤の「安堵の表情」が全てを

連盟に折れたら、陸軍が一步も引かないのは明らか。各政党、世論の総攻撃を受け、内閣は一日も保たなかったろう。第二の五・一五事件が起きないとも限らない。西園寺も齋藤も、連盟脱退のもたらす国際的影響より、脱退しないことによって激化する国内の反発を恐れたのだ。

松岡宛て政府訓令

「總會ヲ採決ヲ見ル場合ハ連盟脱退ノ方針ヲ
定メ連盟會議カラ退場ヲ断行スヘシ」

●脱退を深刻に考えておられた昭和天皇

昭和8年歌会始御題「朝海」に

あめつちの 神にぞいのる 朝なぎの
海のごとくに 波立たぬ世を

▽内田外相に 注意された

「これまでのことは止むを得ないが、今後は外交
を一層慎重にし、特に英米との親善協力に努力
するように」

▽「詔書を出したい」の 申し出に

鈴木貫太郎(隴嶺)を呼び「詔書を出す場合には、
首相、外相に次の点を付け加えるよう」

- ①脱退止むなきに至ったのは誠に遺憾である
- ②ますます国際間の親交を篤くし協調を保つ

●日本の脱退は、国際連盟の無力を露呈した

▽小国が 対日経済制裁を要求しても

連盟は「満州国不承認」を 決議しただけ
実効ある措置をとれず「連盟頼むに足らず」

▽日本国内は「国際的孤立」を「光榮ある孤立」

「断乎として所信を貫けば英米恐るるに足らず」

▽陸軍は 脱退大歓迎

部内文書で「アジア・モンロー主義の宣言であ
り、欧米追随外交、萎縮退嬰外交の思想を清算、
排撃して、自主独立外交への躍進である」

モンロー主義

欧米両大陸の「相互不干渉」を主張するアメ
リカ外交の原則。第5代米国大統領モンローが
1823年、ラテン・アメリカ諸国独立に対するヨ
ーロッパ諸国の干渉を拒否する宣言を出した
ことに基づく。次第に拡大解釈され、他の諸国
への影響力行使に利用された。

▽勝ち誇った 陸軍の姿勢

「アジアのことは全て日本がやる」

松岡は政府訓令に

陸軍随員の建川美次中將に、気炎を
挙げた。「西園寺は俺に向かって、ど
んなことがあっても政府に連盟から
脱退させるようなことはさせない、
と約束した。それなのに、この最後の
訓令は何だ」

事實は、松岡が出発前の挨拶に来た
時、西園寺は風邪で寝ていて、秘書に
「必ず纏めて帰るようにしたい」と言
伝てして帰ったのだという。

建川 美次(たてがわ・よしつぐ)

明治13(1880)～昭和20(1945)新潟県生
まれ。陸軍中將。昭和6年参謀本部第2(備
勅)部長を経て第1(作戰)部長となり、満州
事変を指導した。15年駐ソ大使

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)

慶応3(1867)～昭和23(1948)大阪生ま
れ。海軍大將。連合艦隊司令長官、軍令
部長を経て昭和4年侍從長。二・二六事
件で瀕死の重傷、奇跡的に助かる。20年
首相となり、聖断で戦争を終結させる

国際連盟脱退の詔書(3月27日)

朕惟フニ、曩ニ世界ノ平和克服シテ
国際連盟ノ成立スルヤ、皇考之ヲ憐
ヒテ、帝国ノ参加ヲ命シタマヒ、朕亦
遺緒ヲ繼承シテ苟モ懈ラス、前後十
有三年、其ノ協力ニ終始セリ。今次満
州国ノ新興ニ當リ、帝国ハ其ノ独立
ヲ尊重シ、健全ナル発達ヲ促スヲ以
テ、東亜ノ禍根ヲ除キ、世界ノ平和ヲ
保ツノ基ナリト為ス。然ルニ不幸ニ
シテ、連盟ノ所見之ト背馳スルモノ
アリ。然リト雖、国際平和ノ確立ハ朕
常ニ之ヲ冀求シテ止マス。是ヲ以テ、
平和各般ノ企図ハ、向後亦協力シテ
渝(成)ルナシ。今ヤ連盟ト手ヲ分チ、
帝国ノ所信ニ是レ從フト雖、固ヨリ

- 一時的な「小康」の代わりに、「戦争」の大きな代償
- ▽・総武線 両国ー市川間の電化完成(3月15日)
 - 両国ー千葉の電車が 10分間短縮された
 - ・「ヨーヨー」大流行 持参禁止の学校も
 - ・古川ロッパら 浅草で「笑いの王国」結成(4月1日)
 - ・新宿のムーラン・ルージュも 連日 超満員
- ▽「高橋積極財政」で 景気も上向き
 - 満州国承認 国際連盟脱退で
 - 陸軍や 国民世論を 満足させたが…
- ▽「栄光ある孤立」は
 - 「破滅ある孤立」への ステップだった
- ▽ドイツに 1月 ナチス・ヒットラー政権誕生
 - 10月14日 連盟を脱退し 再軍備宣言
- ▽東と西の孤児同士 手を握り合う宿命に
- ▽アメリカには ルーズベルト大統領
- ▽昭和9年9月 ソ連が 国際連盟に加入
- ▽第2次世界大戦の 対立の構図
 - 枢軸国対連合 二つの陣営が 形成される

東亜ニ偏シテ友邦ノ誼ヲ疎カニスルモノニアラス。愈信ヲ国際ニ篤クシ、大義ヲ宇内ニ顕揚スルハ、夙夜、朕カ念トスル所ナリ。方今、列国ハ稀有ノ世変ニ際会シ、帝国亦非常ノ時艱ニ遭遇ス。是レ正ニ挙国振張ノ秋ナリ。爾臣民克ク朕カ意ヲ体シ、文武互ニ其ノ職分ニ恪循シ、衆庶各々其ノ業務ニ淬励(さいれい)シ、向フ所正ヲ履ミ、行フ所中ヲ執リ、協戮邁往、以テ此ノ世局ニ処シ、進ミテ皇祖考ノ聖猷ヲ翼成シ、普ク人類ノ福祉ニ貢献セムコトヲ期セヨ。

古川 ロッパ(ふるかわ・ろっぱ)

明治17(1903)～昭和36(1961)東京生まれ。本名加藤郁郎。雑誌編集者を経て声帯模写で人気を博し、昭和8年徳川夢声らと浅草に劇団「笑いの王国」を結成。映画にも出演して庶民の人気を集めた

ヒットラー(Adolf Hitler)

1889～1945 オーストリア生まれ。大正10年ナチス党首となり、反ユダヤ主義・ベルサイユ条約打破を唱え、昭和8年首相。一党独裁体制を確立し9年総統。第2次大戦を起こしベルリン陥落直前自殺

ルーズベルト(Franklin D. Roosevelt)

1882～1945 昭和8年第32代米国大統領に就任、ニュー・ディール政策を推進して大恐慌を克服。大戦下、強力な指導力で連合軍を纏め勝利に導く。異例の4選を果たしたが、終戦を目前に急逝した